なら燈花会能

平成二十九年 八月六日(日)
おいて 奈良春日野国際フォーラム
甍〜I・RA・KA〜
(旧奈良県新公会堂)

午後一時開演

能

熊野

藤井 丈雄
久保信一朗

福王 和幸
是川 正彦
塩谷 恵
生一 知哉

森山 泰幸
荒木 建作
大久保勝人
上野 朝彦
佐野 和之

野口 亮
林本 大
山中 雅志
吉田 篤史

狂言

清水

茂山千五郎

島田 洋海

井口 竜也

仕舞

實盛 佐野 和之
江口 塩谷 恵
女郎花 山下 麻乃

上野 朝彦
山中 雅志
林本 大
藤井 丈雄

能

景清

中田 能光
佐藤 俊之

福王 知登
喜多 雅人

金春 穂高
辻本 實

石井 保彦
荒木 賀光

中谷 厚行
多田 晃英
本田 陽康
寺村 修

藤田 次郎

徳田 彰
石原 昌和
長谷猪一郎
政木 哲司

附祝言

主催 奈良能 金櫻会

熊野(ゆや)

平宗盛は、東海道池田の宿の熊野を召し出して都に長く留め寵愛していた。今を盛りの花見に熊野を伴って行こうと使いを出す。そこへ熊野の国許から侍女が老母の重病を伝えに来たので、熊野は母の手紙を宗盛に見せ暇を乞うが、宗盛は許さず同行を言い付け、一行は車に乗り東山へ花見に出掛ける。花見車から眺める華やかに浮立つ都の景色にひきかえ、熊野の気は重い。観音様に母の無事を祈願する熊野に、宗盛は酒宴に加わり舞を舞うよう所望する。舞の途中に俄かに村雨が降り花を散らすのを見て熊野は「いかにせん都の春も惜しけれど 馴れし東の花や散るらん」と母の病状を案じる歌を詠むと、さすがの宗盛も心に感じ暇を与え熊野は喜び、これも観音のお陰と感謝し宗盛の気の変わらぬうちにと国許へ急ぎ下る。「平家物語」を素材とした曲で作者未詳、熊野が老母からの手紙を読む(文之段)、花見車で進む道行、清水寺讃仰のクセ、歌を書き付ける(短冊之段)、心進まず舞う(中ノ舞)、村雨が降ってイロエと舞台から目が離せない、見どころききどころの多い人気曲。

清水(しみず)

野中の清水に茶の湯の水を汲みに行くように命じられ、主人の秘蔵の桶を持って出掛けた太郎冠者、行きたくないので鬼が出たと逃げ帰ってくる。秘蔵の桶が惜しいと取り返しに行く主人、出るはずのない鬼に出くわす。鬼と主人のやりとり、さて鬼の正体は?雉も鳴かずば・・・・・
野中の清水は播磨の印南野にある名水、この印南野は鬼が出ると言われる所。

景清(かげきよ)

伯父大日坊を殺し悪七兵衛と呼ばれた景清は、平家の家臣の中で最も武名をたわれた武士。今は日向の国宮崎に流され盲目となり、落ちぶれて「日向の勾当」と名乗り平家節を語りその日その日を暮らしている。幼いころに別れた父存命と聞いた娘は海路をへてはるばると訪ねてくる。わが子と知りながら身を恥じ、そのような者は知らぬと立ち去らせたが、里人は娘の心意を感じ父に対面させる。麒麟も老いぬれば駑馬にも劣るがごとくと恥じる是清に八島での戦物語りを所望すると、義経を討とうと陸にあがり大勢の源氏の兵と戦うなかにも、三保の谷との鍛引きの様を仕方を交え勇壮に語る。語り終えて余命いくばくもない身、娘に死後の弔いを頼み情を断ち切り娘を故郷に帰らせる。シテの初句「松門ひとり閉じて年月を送り」の謡はききどころ、「習多キモノナリ能々心シテ謡フベシ」と。老武者ものの名曲。